

30 古典医書における字から詞へ変化例

郭¹⁾ 秀梅・加藤²⁾ 久幸

中国の古典医籍は「汗牛充棟」と言い表されるように、その数はおびただしい。このような莫大な医籍は中国伝統医学が他の世界のいかなる伝統医学より当代まで継続させている一因ともいえる。そこには数千年以来、安定した漢語文法、および時代に從つて変化し、受け継がれた単語による影響が大きい。

一般に、漢語では単語から単語へ変化するのは、言語が発展する特徴と考えられる。そのため、古代の書籍をうまく理解できるようになっている。医学術語も例外ではなく、常に変化し、古代から当代へ続いている。ここでは歴史的に注目されていない特有な現象について、例を挙げてみよう。

1、厥『説文解字』には「厥、併氣也。」「素問」瘧論篇第三十五「肺素有熱、氣盛於身、厥逆上肺。」漢・劉熙

『釈名』には「厥、逆氣從下厥起上行入心脅也。」つまり「厥」の意味は本来、気が上方へ逆にのぼることを指す。さらに、その意味は、身体下部から上部に進む病状を厥逆と称している。

2、疸『説文解字』には「疸、黃病也。」「素問」平人氣象論第十八「溺黃赤安臥者黃疸。」「疸」の意味は本来、黄色の病である。後世に「黃」を付け、「黃疸」と変化させて、疸の意味を示すようになった。さらに酒疸・女勞疸・穀疸・黒疸などに分類され、「疸」の意味は拡大したと考えられる。さらに、疸は、瘰、瘰と混用される記載が多く存在している。

3、喘『説文解字』には「喘、疾息也。」「素問」五閱五使第三十七「故肺病者、喘息鼻張。」現在、喘息が病名になっているのは長い歴史的な変化を経たことと言うまでもない。一例を挙げれば、喘息病が『周礼』「上気疾」は喘息の最も古い用例と考えられる。

4、瘀『説文解字』には「瘀、積血也。」「段玉裁注」血積於中之病也。」「武威漢代医簡」には「當出血久瘀」があり、「傷寒論」弁陽明病脉証并治第八「不大便者、有

血。」瘀の積血が原意をもつため瘀血・瘀熱などの表現法も生じた。また、瘀が淤と通用する説もある。

5、疝は疝の俗字とされ、『説文』には「疝、腹中急痛也。」「金匱要略」婦人妊娠病脈証并治第二十一「婦人懷妊、腹中疝痛。」疝痛はまた絞痛・橄痛・攪痛に作る。『小品方』の橄痛、『諸病源候論』の疝痛、『外台秘要方』の絞痛など、即ち、「Jiao」に痛を付けて詞を形成している。

このような表現はさまざまな古医書に記載されているが、腹痛の症状に限り用いられている。

6、喝『玉篇』には「喝、中熱也。」「傷寒論」弁痙濕喝脈証第四「太陽中喝者、発熱惡寒。」「金匱要略」雜療方第二十三「繞喝人臍。」「漢書」武帝紀には「夏大旱、民多喝死矣。」の用例があり、師古は「喝死、中熱而死也。」と注釈している。『傷寒論』と『金匱要略』に喝・中喝が併存していることは、この時代より混用していたことを想像させる。

7、痺『説文解字』には「痺、風病也。」「靈樞」熱病第二十三「痺之為病也、身無痛者、四肢不收。」また、『諸病源候論』風痺候「風痺之状、身体無痛、四肢不收。」

この記載は中風後遺症を定義している。「靈樞」の時代から下り隋代には、既に用語の変化が見られることは用例の如く明らかである。

以上の例から、いずれも、一字に含まれていた本来の意味が二つ字で表現され、固定的な医学術語に変化した。これらの派生語により症状をさらに詳細している。逆に言うと、医書の特有な用語を字書に絞って採用された可能性も排除できない。そのゆえに、江戸期の学者達は「字書に基づいて医書を改めていけない」と大胆な主張をしている。これは中国学者が言えない問題と考えられる。

(順天堂大学医史学研究室・北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究所、中国伝統医学研究所)²⁾